小学校中学年部会

よりよい生き方を実践する力を育む道徳教育の充実
ー考え合い、互いを認め合えるみどりっ子ー

三河地区　みよし市立緑丘小学校　味岡　里紗

１　はじめに

みよし市は愛知県のほぼ中央に位置し、教育に対する関心が高い地域である。本校では、「緑丘小の子どもたちには力がある」を合言葉に、学び合う授業づくりや異学年交流、地域学校協働活動など、子どもが主体的に人と関わりながら学ぶ教育活動を大切にしてきた。

その結果、子どもたちは学校生活に充実感を感じるとともに、人と関わりながら学ぶことのよさを実感している。しかし、令和８年度全国学力・学習状況調査の質問紙調査からは、さまざまな活動に意欲的に取り組んでいる一方で、自分自身への自信や自己肯定感については十分とは言えない状況が見られた。

そこで本校では、これまで大切にしてきた「人との温かい関わり」に着目した。人との対話や体験を通して自分自身を見つめ、多様な価値観に触れながら自分や他者のよさに気付くことができれば、自己肯定感が高まり、よりよく生きようとする心が育つのではないかと考えた。そこで、道徳科を要として家庭・地域と連携した教育活動を展開し、「考え合い、互いを認め合えるみどりっ子」の育成を目指して研究を進めることとした。

２ 研究の概要

（１）目指す子ども像

① 考え合い、互いを認め合える子
②人との温かい関わりの中で豊かな心を育む子

（２）研究仮説

仮説１

道徳科や関わりを生み出す「にこにこトレーニング（以下、「にこトレ」とする）」において、対話を通して多様な価値観に触れ、自分の考えを見つめ直す学習を積み重ねれば、自分や他者のよさに気付き、互いを認め合おうとする心が育つだろう。

仮説２

日常の学校生活において、家庭・地域との関わりを生かした体験活動と道徳科の学びを意図的に関連付ければ、自分が周囲の人々に支えられていることを実感し、自己肯定感を高めながらよりよく生きようとする心が育つだろう。

（３）研究の手だて

手だて１

対話を通して互いを認め合う道徳授業の充実

道徳科において、ローテーション授業や学年の担任間での意見交換、指導案検討会・模擬授業などを通して授業改善を図る。また、「学びの足あと」やユニット単元による授業実践により、これまでの学びや自分自身の考えの変容を振り返りながら、多様な考えに触れて学びを深める授業づくりを行う。

手だて２

人との関わりを支える「関わる力」の育成

道徳科において互いの考えを認め合いながら学びを深めるため、人と円滑に関わる力を育てる。コミュニケーション能力の向上を目的とする活動である「にこトレ」を継続的に実施し、コミュニケーショ

ン能力や共感的な人間関係を築く力を育成し、安心して考えを伝え合うことのできる集団づくりを目指す。

手だて３

家庭・地域との連携による体験活動の充実

学校生活において、親子道徳や地域講師による出前授業、正課クラブ、読み聞かせ活動、「地域ありがとう集会」などを実施し、家庭や地域の方々との関わりを通して多様な生き方や考え方に触れ、自分自身の生き方について考える機会を充実させる。

３ 研究の実際

（１） 対話を通して互いを認め合う道徳授業

ア 学年で高め合う道徳授業

本校では、道徳科の授業を隣の学級担任も参観できるようにしている（**資料１**）。低学年では専科教員を、中学年以上は一部教科担任制を取り入れることで、互いの道徳科の授業参観をできるように時間割を調整している。それにより、学年で授業内容を打ち合わせ、互いに見合って意見交換したり、主任が若手教員を指導しながら授業を行ったりすることができる。互いに参観し合って発問を少し変えたり、発問に対して子どもたちからどんな意見が出されるのか事前に把握したりすることで、よりよい授業づくりに努めることができる。



【資料１　若手担任の道徳授業を見守る学年主任】

また、一つの教材を一人の教員が隣の学級でも授業をするローテーション道徳も時々行っているため、ねらいや主発問はどうだったか、どの子どもの発言が学びを深めるチャンスだったか、子どもたちへの切り返しや受け答えはどうしたらよかったかなどを客観的に見ることができ、互いに学ぶことは多い。それを、その日の授業後に話し合い、共有することで、ねらいや主発問の立て方、教材の読み取り、教師の反応といった授業力の向上につなげることができている。さらに、研究授業の前には、教員が児童役となって模擬授業を行うことで、発問の意図や教材提示の仕方、切り返しの効果について事前に検討することができる。その中で、児童のさまざまな反応を想定しながら、授業をより具体的に構想することにつながっている。

イ 学びの足あと

本校では、学び合いの手だての一つとして、教科で学んだことを「学びの足あと」として教室に掲示し、子どもたちがこれまでの学びを足がかりとしながら学習を進める取組を行っている。道徳科では、考えたことや気付いたことを共有するためにはどうしたらよいかを道徳部で話し合い、授業の板書を写真に撮り、教室前の学年スペースに掲示して、いつでも見られるようにしている（**資料２**）。また、毎時間の板書写真を上に貼り重ねていくことで、以前の内容を振り返ったり、互いの学級の内容を比較したりすることもできるようにしている。子どもたちの中には、自分や級友の発言を見返して話題にする姿も見られる。特に低学年では、長く書くことや覚えていることは難しいが、写真を見返すことで、道徳の学びを心に積み重ねていくことができていると感じている。



【資料２　学びの足あとを見ながら、授業を振り返る子どもたち】

また、子どもたちだけでなく、教員同士の学びの場にもなっている。授業者が、授業後の自分の板書を客観的に振り返ったり、他学年の教員の板書の記録を互いに見合ったりすることができるため、思考の助けとなるシンプルで分かりやすい板書づくりに生かすことができている。その後の道徳の授業の板書に生かす方法を知ることができる。それに加えて、その掲示を翌年の授業を行う時の参考にするこ

とも想定している。

（２） ユニット単元を設定した授業づくり

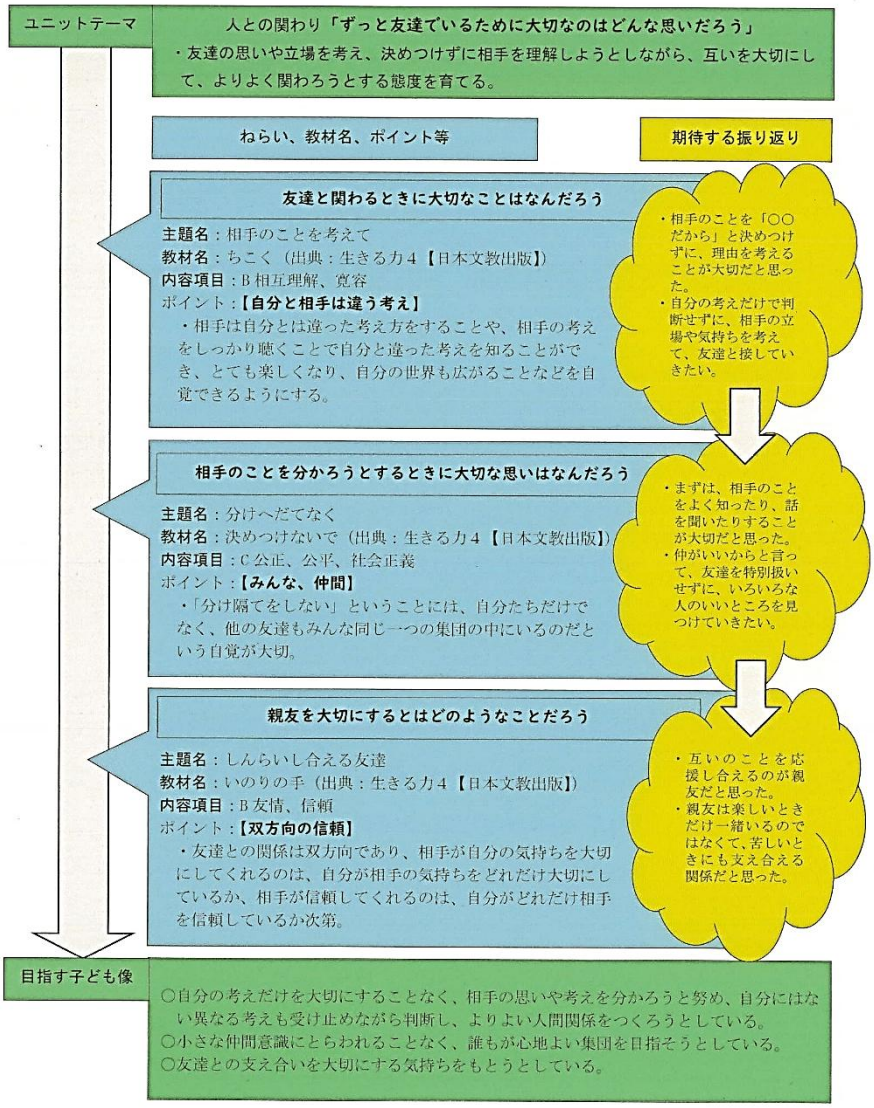
ア　ユニット単元構想図

教材や道徳科に関連した教育活動をまとまりとして捉え、道徳的価値をより重点的、効果的に深めていくために、ユニット単元を構想した（**資料３**）。昨年度まで本校が取り組んできた「地域連携」は、一つの教材と結びつきの強い地域、家庭と関わりのある教育活動を意図的に関わらせることでよりよい生き方を探りながら教育活動の効果を生み出すために取り組んだ。

今回は、複数の教材を同じテーマのもとで関連付けながら指導することで、子どもたちが主体的に考え、対話を通して互いの考えを深めながら、よりよく生きるために大切なことを見いだすことを目指し、ユニット単元を構想した。４年生という発達段階では、子どもたちは、友達などの身近な相手との関わりが深まっていく時期である。その中で、けんか、すれ違い等の心の葛藤を感じるようなさまざまな出来事を経験している。そのため、「人との関わり」についてユニット単元を組み、「ずっと友達でいるために大切なのはどんな思いだろう」というテーマに対して多面的に考える授業に取り組むことで、相手の心を大切にすることのよさに気付くことができると考えた。

第４学年２組　特別の教科　道徳　ユニット単元構想図

令和８年６月１９日　第５校時　４年２組教室　指導者　味岡　里紗



【資料３　ユニット単元構想図】

イ　授業の実践

（ア）子どもたちを揺さぶる教師の切り返し

ハンスとデューラー、それぞれの思いに着目してほしいと考え、展開前段では、お金と一緒に手紙を受け取ったデューラーの思いと併せて、「長い間、お金を送り続けたハンスは、どのような思いだったのか」について考えた。互いに画家になるという夢を追いかけていた二人の中で、先にデューラーへ絵の勉強を譲ったハンスの思いに迫った（**資料４**）。

すると、Ｃ１やＣ２のように、「絵の勉強に集中してがんばってほしい」など、デューラーを応援する前向きな思いが多く出された。その中で、Ｃ３の「自分は勉強できないけれど、デューラーが勉強できればそれでいい」という発言を取り上げ、ハンス自身は夢を叶えられなかったことにも目を向けさせた。「ハンスはそれでよかったのか」「ハンスに後悔はなかったのか」と問い返すことで、ハンスの中には、デューラーの夢が叶うことを願う思いだけでなく、自分の夢を諦めなければならなかった葛藤や苦

しみもあったのではないかと考えさせようとした。

しかし、子どもたちからは、「後悔はない。自分の絵を描いてくれたから」「デューラーが画家になってくれたから後悔はない」など、ハンスはデューラーが夢を叶えたことに満足しており、後悔はなかったという意見が多く出された。そのため、教師が問い返しによって子どもたちの考えを揺さぶろうとしたものの、「ハンスに後悔はない」という考えを十分に揺さぶり、ハンスの複雑な思いについて多面的に考えを深めるまでには至らなかった。

今後は、「ハンスは本当に一度も後悔しなかったのかな」「もし自分だったら、友達の夢を応援しながら、どのような気持ちになるだろう」など、ハンスの心の中にある複数の思いに目を向けることができるような問い返しを工夫する必要がある。また、「後悔はない」という意見についても、その理由をさらに問い返したり、異なる考えをもつ子どもの意見と比較したりすることで、一つの考えを多面的に捉えられるようにしていきたい。

C1：絵に集中してほしい。
C2：がんばってほしい気持ち。
C3：**自分は勉強できないけれど、デューラーが勉強できればそれでいい。**
C4：自分が言ったことだからうまくなってほしい。
T：さっきC3さんはなんて言っていた？
C5：デューラーが勉強できたらそれでいい。
T：ハンスはそれでよかったの？
C6：デューラーの方がハンスよりも絵がうまかったから、しっかり勉強してくれたらデューラーのやりたいことにつながる。
C7：デューラーが一番がんばってほしい。
T：ハンスに後悔はなかった？
C8：**後悔はない。**自分の絵を描いてくれたから。
C9：デューラーが絵描きになってくれたから**後悔はない。**
C10：デューラーがうまいからその後画家になろうと思っている。
C11：**もうこの手だと駄目だから**デューラーだけでも。
C12：デューラーの方が、絵がうまかったから**後悔していない。**

【資料4 授業記録より抜粋】

（イ）子どもの多様な考えを引き出す教師の切り返し

中心発問では、「いのる手」の作品に、デューラーがどのような思いを込めたのかについて考えた（**資料５**）。ここでは、見返りを求める関係ではなく、デューラーとハンスが互いを思いやり、大切に思っていることに目を向けさせたいと考えていた。子どもたちからは、C13～C20のように「感謝」、「お礼」、「お返し」などの言葉が多く挙がった。そこで、C21「心を込めて描いた」という発言を切り口に、「どんな心を込めて描いたのか」と切り返し、デューラーの思いにより迫ることを試みた。しかし、その後も「申し訳なさ」や「ありがとう」という感謝に関する発言が続いた。

本時を振り返ると、C18は「みんなにハンスのおかげで絵が描けたと伝えたい」と発言しており、ハンスへの感謝を他の人にも伝えたいと新たな視点を示していた。この意見を取り上げて、「今のC18さんの意見ってどういうこと？」と全体で考える時間を設けることで、感謝の思いをより多面的に捉えることに繋がったのではないかと考える。

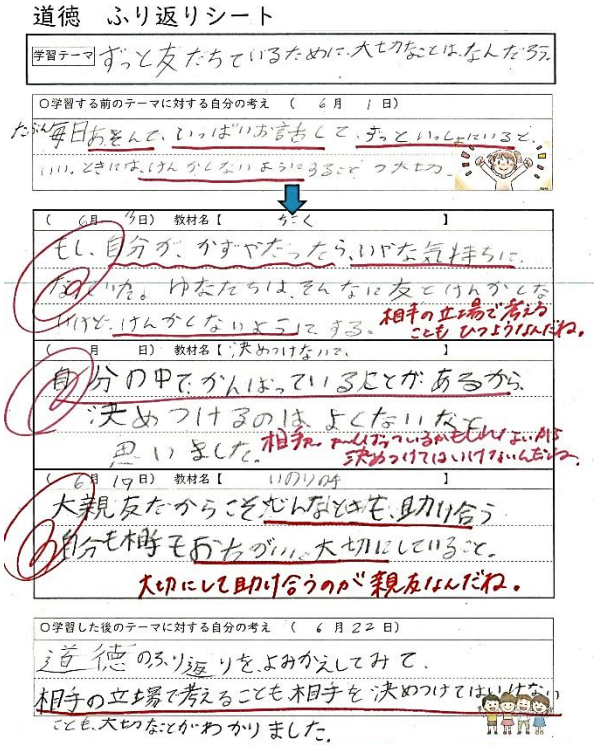
また、C19の「ごつごつした手で」という発言から、「どうしてハンスの顔や姿ではなく、手を描いたんだろう」と切り返し、ハンスの手に注目させることで、自分の画家人生を支えてくれたハンスの思いに応えたいというデューラーの思いに、より迫ることができたのではないかと思う。

T：デューラーはハンスの絵を描いたんだよね。特別に用意しました（額縁に入った作品の提示）。どんな手をしている？
C：すごいごつごつ。
T：デューラーはどんな思いで、「いのる手」 を描いたのかな。
C13：これまでがんばってくれた**感謝**のしるし。
C14：助けてくれた**お礼。感謝**の気持ち。
C15：必死に働いてお金を助けてくれたからお返しに描いた。
C16：デューラーのためにお金を送って助けてくれた**お返し。**
C17：いっぱいハンスは自分のためにお金をくれたから、がんばってくれた**お返し。**
C18：**感謝**の気持ちもあるんだけれど、**みんなにハンスのおかげで絵を描けたと伝えたい。**
C19：手でよく働いた。**ごつごつした手で**。その**お礼。**
C20：**お礼**の気持ちもあるんだけれど、**ありがとう**の気持ちも大きい。
C21：助けるためだから、**心を込めて描いた。**
T：どんな心を込めて描いたの？
（ペアで意見交流）
C22：二人とも最初は絵の勉強をするために版画のところにいたけど、ハンスは自分のやりたかった夢を捨てて、デューラーは**申し訳なさを感じていた。**
C23：絵が描けなくなるまで働いてくれたから、**ありがとう**の気持ちを込めた。

【資料5 授業記録より抜粋】

ウ　振り返りシート

各教材の授業の振り返りや、学習前と学習後におけるテーマに対する自分の考えを、一枚の「ふり返りシート」にまとめられるようにした（**資料６**）。児童Ａは、ずっと友達でいるために大切なこととして、学習前には、「毎日遊んで、いっぱいお話して、ずっと一緒にいること。ときには、けんかをしないようにすることが大切」と記述していた。「ちこく」では、学習前の考えでも、振り返りでも、「けんかをしないようにする」と記述し、深まりや広がりは感じられなかった。しかし、「決めつけないで」で、公正・公平をねらいに考えたことで、決めつけることはよくないという新たな価値に気付いた。そして、「いのりの手」で友情・信頼について考えると、「自分も相手も互いに大切」という深まりが見られた。



【資料６　振り返りシート】

本ユニットの学習を積み重ねる中で、学習後には、「相手の立場で考えることも、相手を決めつけてはいけないことも大切なことだと分かりました」と記述した。この記述から、児童Ａは、ずっと友達でいるためには、友達と仲よく過ごすことだけが大切なのではなく、互いの立場や思いを考え、相手を決めつけずに関わることも大切であると捉えられるようになったことが分かる。

前時までの振り返りや学習前の自分の考えを授業のたびに見返すことができるようにしたことで、子どもたちは自分自身の考えの変容を実感しながら、学びを積み重ねていくことができた。また、内容項目が異なる教材であっても、ユニット単元を貫くテーマを設定し、それを軸として授業を行うことで、教師も子どもも常にテーマを意識しながら学習を進めることができた。

（３）関わる力を育てる取組「にこトレ」

道徳科において互いの考えを認め合いながら学びを深めるためには、人と円滑に関わる力が基盤となる。そこで本校では、「にこトレ」と称し、継続的に取り組んでいる（**資料７**）。


【資料７　顔を寄せ合って協力して取り組むにこトレ】

「学び合い」におけるペア活動やグループ活動など、児童がさまざまな形で学びを深める土台にあるのが「関わる力」である。本校では、毎週水曜日の朝学習の時間に「関わる力」を支えるコミュニケーション能力や、ＳＥＬ（ソーシャル・エモーション・ラーニング）の要素を取り入れ、対人関係スキルの定着やよりよい人間関係を築く力を養うことを目指す「にこトレ」に取り組んでいる。児童同士で協力して課題解決する経験を通して、気持ちの表現・話の聴き方に意識を向けたり、互いのことを深く知ったりすることを通して、円滑な人間関係を育成し、日々の学校生活に生かすことを目指している。昨年度は学級・学年の壁を越えて全校縦わり班で行う異学年「にこトレ」にも取り組んでいる。この取組の成果として、本校では、授業だけでなく、学校生活全般を通して、自分の意見を言うだけでなく、「どう思う？」「どうしてそう考えたの？」という言葉が自然と聴かれ、相手の意見や考えを受け入れ、一緒に課題を解決しようという姿が見られている。

６年生の道徳の実践では、意見を交流する場面で相手の表情を見ながら「なるほど、わたしは～」と話を続けたり、「ああ、そういうふうに思ったんだ。ぼくはね～」と相手の思いに共感しながらやり取りを重ねたりする姿が増えてきた。また、ペア活動など相手を指定しなくても、自ら意見交流する相手

を探しながら学びを深めていく姿も見られるようになっている。「にこトレ」で身に付けたスキルを日常生活で活用する場面を設定することで、よりよい人間関係の構築に役立っている。これからも毎月テーマを変えながら継続していき、何気ない会話や授業の中で、互いに認め合っている姿があれば認め、価値付けて、さらに関わる力を高めていきたい。

（４）家庭・地域との連携による体験活動

ア　授業参観での親子道徳の取組



【資料８　親子道徳の様子】

昨年度から９月の授業参観を「親子道徳」と位置付け、親と子が共に道徳的価値について考える機会を設けた。この授業では、実際に保護者が教室の中へ入り、児童の横に座って話し合いにも参加した（**資料８**）。普段は参観するだけの保護者も話し合いに加わることで、児童だけの考えに留まらず、世代を超えた道徳的価値の交流を図ることができた。また、保護者が一緒に話し合うことで、児童の考えを後押しする効果も感じられた。子ども自身の道徳的価値に保護者の考えが加わり、積極的に発言する子どもが多くいた。授業後に取った保護者アンケートでは、「自分たちも考えがまとまらず、他の参加者と話し合いながら帰路についた」と学校外にまで道徳の問いが広がりを見せたり、「自分と子どもの考えが違い、その考えの違いが面白いし、そのような考えがあるのかと感じた」と保護者の考えにも刺激を与えたりすることができると感じた。「親子道徳」を取り入れ、親子で話し合うことにより、多様な価値観に触れながら学びを深めることができた。

今年度４年生の親子道徳では、「Ａ：個性の伸長」の教材について取り上げた。導入の段階では、自分の長所が分からない」「自分に長所はない」と発言する児童もいたが、学級で話す合う中で、「今は短所の部分であっても、長所につながり得ること」「長所は新しく作ることもできること」に気付く姿が見られた。また、同じ班の仲間や親と話したりする中で、自分の長所について改めて見つめ直し、「今日は自分の長所を見つけるのは難しいと思ったけど、意外なところに長所があることを知りました」「毎日こつこつ続けて努力すると、自分の長所をもっと伸ばせると思いました」などと振り返る姿が見られた。

イ　地域の力を生かす

地域学校協働推進員の方が地域の人材発掘に協力してくれている。それにより、田植え・しめ縄飾りづくりといった学年行事や出前授業の講師を紹介していただき、地域の方と共に授業を行っている。さらに、学年の栽培活動や正課クラブで、地域の方を講師として定期的に招いた授業では、児童は生き生きと目を輝かせて活動している。また、図画工作科や家庭科などの道具を使う教科や校外学習の見守りなどでは、保護者ボランティアを募っている。保護者の方も積極的に参加してくださり、児童は安心して活動することができる。月に１・２回は、地域の読み聞かせボランティア団体による読み聞かせを行っており、児童は読み聞かせの日を心待ちにしている。

こうした、地域の方と一緒に行う活動は道徳にも生かされている。例えば、３年生では、社会科と総合的な学習の時間で、自分たちの住むみよし市について学んでいる。その中で、公共施設やみよし市で盛んなカヌー競技場を見学する校外学習を行った。校外学習の前には、道徳科の時間に、「ふろしき」を通して伝統文化・郷土愛、「みんなのわき水」で規則の尊重について考え合ってから訪問した。「みんなが気持ちよく過ごすためにきまりがあると分かった」と道徳科の授業の振り返りに書いていた児童は、施設を案内してくださる方の話をしっかりと聴き、他の人の迷惑にならないように気を付けながら見学しようと努める姿が見られた。５年生では、総合的な学習の時間に、行政区所有の水田で田植えと稲刈りの体験を行っている（**資料９**）。「美しい夢 - ゆめぴりか - 」では、田植えの経験や農家の方の話を元に、郷土を愛する心を深く考えることができた。子どもたち



【資料９　行政区の水田をお借りした田植え】

の振り返りからは、「故郷を愛するということは、他のみんなに知ってもらいたいという気持ちになる」「みんなに自分の故郷を自慢したくなるから、故郷のために努力したくなる」といった言葉が振り返りに記述されていた。３・５年以外の学年でも、これまでに行ってきた地域の力を借りた活動と道徳の関連を見直し、体験の事前事後に効果的に道徳の授業を設定することで、知識と体験を関連付けることができ、道徳性を育む効果を高めることができている。子どもたちは、地域の力を借りて、郷土を愛する心、感謝の心、地域の一員としての自覚、自分にもできるという自己有用感を高めている。

ウ　地域の皆様への感謝を伝える全校集会
「地域ありがとう集会」

日頃から、地域の方々に登校指導や出前授業、防犯パトロールなど、さまざまな形で児童の安全・安心な学校生活や豊かな学びを支えていただいている。そこで、お世話になっている皆様をお招きして、全校児童で感謝の気持ちを伝える集会「地域ありがとう集会」を開催している（**資料 10**）。



【資料 10　地域の方へ感謝を伝える「地域ありがとう集会」】

本校の児童は、感謝の思いをもつことの尊さや大切さについて学びを深めており、「日頃お世話になっている人へ感謝の思いを伝えたい」という心情を行動に移す機会として、児童会からの発案で実施している。代表児童が地域の皆様に対して感謝の言葉を述べたり、手作りの感謝状を渡して思いを伝えたりするなど、児童が主体となって準備・運営を行った。児童の感想には「いつもありがとうが言えなかった交通指導員さんにありがとうが言えてよかった」や「読み聞かせをしてくれている人が僕たちのために時間をかけて本を選んでくれていることが分かった。これからは気持ちを込めて始めと終わりの挨拶がしたい」といった記述が見られた。「地域ありがとう集会」は、児童が地域とのつながりの大切さを実感し、感謝の心を育む貴重な機会となっている。また、児童にとっても「ありがとう」の気持ちなど、なかなか口に出せない思いを言葉や形にして伝えることの大切さを学び、地域の方々とのつながりの温かさを実感する学びの場にもなっている。今後も学校・家庭・地域が連携しながら、児童の健やかな成長を支えていけるよう取り組んでいきたい。

４ 成果と課題

（１）成果

道徳授業における対話を通して、多様な価値観に触れながら自分の考えを見つめ直す姿が見られるようになった。ユニット単元では、複数の教材や道徳的価値から、共通のテーマについて迫ることで、より深まりや広がりを得る姿を見ることができた。また、「にこトレ」の継続的な実践により、相手の考えを尊重しながら話し合う姿が増え、互いを認め合う人間関係の構築につながった。

さらに、家庭や地域との連携による体験活動を通して、感謝や郷土愛、地域の一員としての自覚を実感的に学ぶことができた。人との温かい関わりの中で、自分が周囲の人々に支えられていることに気付き、自己有用感や自己肯定感の向上につながった。

（２）課題

「学びの足あと」の活用については、考えの変容や学びの蓄積をより実感できる方法について検討する必要がある。また、自己肯定感や自己有用感の高まりを継続的かつ客観的に見取る方法についても改善の余地がある。

さらに、家庭・地域との連携を一層充実させるとともに、体験活動と道徳の学びとの関連をより計画的に位置付け、教育活動全体を通して子どもたちの道徳性を育んでいきたい。

本校では、道徳科を要として、人との温かい関わりの中で自分や他者のよさに気付き、互いを認め合う教育活動を進めている。対話による学び、関わる力を育てる取組、家庭・地域と連携した体験活動を相互に関連付けることで、子どもたちは他者とのつながりの中で自己を見つめ、よりよく生きようとする心を育むことができる。今後も、人との関わりを生かした道徳教育の充実を図りながら、「考え合い、互いを認め合えるみどりっ子」の育成を目指していきたい。